UNIVERSITY OF YAMANASHI
はなみずき
（病院だより）
第57号
2012年1月1日
発　行
山梨大学
医学部附属病院

新年のあいさつ

病院長　島田　眞路

新年あけましておめでとうございます。

今年の目標は、病院再整備に向かって新たな一歩を踏み出すことです。おかげ様で昨年末には新病棟、旧病棟への各診療科の配置が決まり、３年後着工予定の中診、外来の配置の基本設計もほぼ完成しました。案を初めて提示してから１ヵ月半というスピード決着は皆様の多大なるご協力なしではなしえませんでした。深謝いたします。今年はこの基本設計に基づき、新病棟の「実施設計」をできるだけ早く確定させ、着工したいと考えています。

昨年は東日本大震災南三陸町医療支援をはじめ、いろいろな出来事がありました。この支援は３月18日から５月13日まで続き、計22班、124名を送りました。さらにその後も気仙沼に脳神経外科の堀越准教授をリーダー、地元出身の精神科　大槻医員をサブリーダーとするチームを派遣したり、12月にも福島県のいわき市立総合磐城共立病院にも麻酔科の中楯助教、小児科の犬飼准教授に行っていただきました。これらの支援は現地に大いに役立ったのはもちろん、本院の“病院がひとつのチーム”という志気の高さと団結力･絆の強さを改めて再認識させてくれるものでした。

嬉しい出来事もいろいろありましたが主なものを３件あげます。一つめは研修医マッチング数の増加です。一昨年、研修医マッチングでは16名と史上最低を記録しましたが昨年は30名とほぼ倍増し胸をなでおろしました。

二つめは９月１日に新たに臨床研究開発学講座という寄附講座が発足したこと。以前第２外科におられた岩崎甫教授が就任されました。これを契機に本院の臨床研究、臨床試験が質的量的に格段に向上することを願っています。

三つめは懸案であった市立甲府病院の消化器内科が全く新たな形で再開されたことです。消化器内科は佐藤公准教授のリーダーシップで病院内で最もactiveな診療科となったと伺っております。

その他懸案事項が目白押しの年ではありましたが、皆様のご協力で無事乗り切ることができました。今年も“病院がひとつのチーム”というスローガンでぜひよろしくお願い申し上げます。

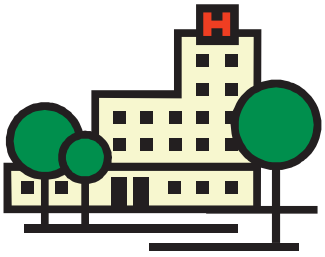
病院再整備について

副病院長　藤井　秀樹

新年おめでとうございます。さて、島田病院長のリーダーシップのもと、各部署からのヒアリングも終了し、また多くのワーキンググループの検討も進み、新病棟の概略がみえてきました。これまで、多くの時間を費やしてくださった皆様方に心より感謝申し上げます。

病院再整備の準備も佳境に入ってきたというところでしょうか。いよいよ24年度からは新病棟の建設が始まります。これから３月までの短期間に病院の基本設計図が描かれるわけですが、現時点で、最も重要なのはどのようなコンセプトで設計を考えるかです。ご存知のように、新病棟の面積は文部科学省により厳密に制約されています。この制約のなかで最重視すべきは、やはり患者さんによりよい医療サービスを提供しうること、多くの医療従事者によりよい職場環境を提供すること、そして大学病院の最も重要な使命である、よりよい教育環境と研究環境を提供することだと考えます。確かに、限られた面積基準の中でこれらすべてを充分に満たすことは困難なことかもしれません。しかし、幸いなことに、文部科学省との３年近くの大変困難な折衝により、旧病棟の一部を医学部の施設として使用できる学部転用も許可されました。

新病棟建設は長年の夢であっただけにその期待は大きなものがあります。皆さん一人ひとりが夢を持ち、また期待されておられることと思います。そうであるからこそ、逆に将来の病院がどうあるべきかを、広い視野で考えていただきたいと思います。



新任あいさつ

臨床研究開発学講座　教授　岩崎　甫

平成23年９月１日付けで臨床研究開発学講座の特任教授として着任しました岩崎　甫です。私は東京大学から本院開設時に第２外科に移り、平成５年まで一般外科の診療や教育に従事しており、本学に18年を経て戻ってきたこととなります。この間、医薬品を創り出すことも医師が活躍できる場と考え企業の研究開発部門にて医薬品の開発をしておりました。平成５年からはドイツのヘキスト、平成17年からはイギリスのGSKに所属しワクチンの開発をも経験しました。当時は新GCPが施行され、グローバル化に対応した治験の活性化やドラッグラグの解消への様々な施策がなされ、環境が大きく変化した時代でした。企業に移る際には多田教授のご理解により非常勤講師となり、また後には当時の貫井学長から産学連携の協力を依頼され客員教授として勤める機会を得ました。このように企業に移った後も本学との関係は残り、前田先生が学長となられた後も続けられたことが底流となり、EPSの厳社長の支援、また島田病院長や有田医学部長のご理解のもと、本講座の開設が具体化し会社を辞して大学に移った次第です。

この講座は、山梨大学医学部における臨床研究の活性化や治験の推進を図るべく設置されました。医学の分野では日本の高いレベルの基礎研究を臨床応用に繋げる努力が内外から求められています。この状況の中で大学病院の果たすべき役割は明らかですが、一方で取り巻く環境には厳しいものがあります。ただ、先生方の臨床研究に対する高い熱意も感じています。この意欲を後押しして少しでも本学や山梨地域の臨床研究や治験を活発にするために、皆様の協力の下でその基盤づくりに努めたいと考えております。活気に満ちた山梨大学医学部附属病院を目指して何卒よろしくお願い申し上げます。

診療施設の用途変更に係る事前連絡について

医学部事務部長　白沢　一男

先般、厚生労働省関東信越厚生局に「放射線管理区域内の構造設備変更承認申請」を行ったところ、一部の施設において厚生労働省の事前承認を受けず用途変更がなされていたことが発覚し、指導を受けました。

構造設備に関する申請手続きは、院内各部署からの報告に基づき、総務課で取りまとめて行うものですが、この度の事態は、パーテーション等により簡易的に室内の改修工事を行ったり、室名を変更したり、あるいはエックス線機器の配置を変更したことが事務担当に報告されずに（結果的に厚生労働省の承認を得ないまま）行われていたことにより発生したものです。11月４日に実施された同局調査官４名による実地検査の際にも、法令違反事項が多数指摘され、病院として始末書の提出を余儀なくされました。

本院としては、このことを重く受け止め、室内の模様替え工事や室名変更、エックス線機器の設置、移動、廃棄に関しては、必ず事務担当へ連絡するよう、病院主要会議等で注意喚起し、併せて各部署に確認調査を依頼したところです。

今後、病院再整備やリニアック棟新設など大規模な病院改修工事が予定されています。今回指摘された法令違反を繰り返せば、これら後続する工事に影響し、ひいては患者さん方に大きな迷惑をかけることとなります。各部署におかれましては、部局長を中心に細心の注意を払い、手続き上遺漏のないようご協力をお願いします。

なお、本件の連絡先は次のとおりです。

・総務課総務・研究協力グループ	（内線2014）
・管理課病院契約グループ	（内線2134）

医療法の規定に基づく立入検査について

総務課　総務・研究協力グループ　主任　杉山　恭加

昨年９月22日、医療法第25条第３項の規定に基づく立入検査が、16名（山梨県11名、関東信越厚生局５名）の検査官により実施されました。当日は、医療安全、院内感染対策、管理関係、個人情報保護、看護、放射線、薬剤、給食関係など多岐にわたる検査及び現場視察が行われ、本院は島田病院長を筆頭に、各部門長等が対応にあたりました。

検査終了後の講評及び結果通知では、「概ね良好」の結果を受けておりますが、立入検査により確認された事項のうち、特に「全職員を対象とした医療安全のための研修及び院内感染対策のための研修については、全ての職員がそれぞれの研修を少なくとも年度当たり１回は受講するための方策を検討すること」について指導を受けております。検査当日の口頭指導では、職員健康診断の未受診者についても指摘がありました。研修の未受講や健康診断の未受診が、病院全体のマイナス評価となることを、今一度、職員一人ひとりが再認識する必要があると思います。

各部門におかれましては、個別に指導を受けた事項に関して、積極的な取り組みをお願い致します。これからも円滑な改善を進めるため、部門間の壁を取り払い、より良い協力体制の構築を推進していきましょう。

歯科特定共同指導行われる

医事課補佐　高山　俊雄

昨年11月10日、11日の２日間、厚生労働省、関東信越厚生局、山梨県による特定共同指導（歯科）が実施されました。

これは関係法令に基づき保険診療の質的向上及び適正化を図ることを目的としたもので、１日目の午前中は病院情報システムの説明と部門ごとの院内巡視が、午後は事前に通知のあった患者カルテの診療内容について、歯科口腔外科の主治医と医事課担当者に対して指導監査が行われたほか、看護部門や事務部門に対しても指導監査が行われました。

２日目は、午後から臨床講義棟小講義室に医科・歯科問わず関係職員を集め、厚生労働省・田村特別医療指導監査官から“保険診療に関する集団指導”の後、講評が行われ、各項目で改善の指導を受けました。

講評後、島田病院長から、“知らなかったでは済まされない”と療養担当規則など諸規則に則った保険請求の必要性を痛感する挨拶がありました。

いわき市立総合磐城共立病院への支援について

麻酔科　助教　中楯　陽介

全国医学部長病院長会議被災地医療支援委員会の要請に基づく医師派遣として、平成23年12月12日から16日までいわき市立総合磐城共立病院に医療支援に行ってまいりました。

いわき市立総合磐城共立病院は病床数828の福島県浜通り地方の中核病院です。私は以前に１年間麻酔研修していたこともあり、医療支援に行くことを決意いたしました。ここ数年の実績は、手術件数は年間約4,800件程度、麻酔科管理約3,500件程度で、常勤麻酔科医師７人の体制で業務をしていたそうですが、４月以降は麻酔科医師３人、歯科麻酔科医１名に減少し、非常勤医師や医療支援医師の応援により対応しているそうです。また、震災に伴い、４月と５月の手術件数は減少していましたが、その後例年並みに回復しているとのことです。

今回、私の業務内容は通常の手術麻酔でした。麻酔科医、手術室スタッフのご配慮もあり心地よく仕事させていただきました。現在、特別な診療をしているわけではありませんが、麻酔科医師数は明らかに不足しており、支援が必要な状況はしばらく続くと考えられます。今後も大学として、医師派遣について事務的な面でもさらにご配慮いただき、支援しやすい環境が望まれると存じます。今回の派遣にあたり、麻酔科をはじめとした関係者の皆様から快く送り出していただいて感謝しております。ありがとうございました。

小児科　准教授　犬飼　岳史

いわき市立総合磐城共立病院は約50万人の医療圏で唯一の小児科入院施設ですが、７名だった小児科常勤医が、震災後は派遣元の東北大学からの補充が難しく５名体制となっています。甲府市医療圏の４病院に約20名の小児科医が常勤しているのと比べると、その過酷さがよくわかります。当然ながら常勤医だけでは小児救急対応が困難となり、小児科学会を通じて全国の小児科医が支援にあたってきました。10月からは全国医学部長病院長会議被災地医療支援委員会が窓口となって今回の派遣が実現しました。

私が担当したのは、12月24日土曜日の午前８時半から翌朝までで、準夜帯までに受診した30名中８名が紹介状を持っての２次救急患者さんでした。幸い大部分の患者さんは帰宅可能でしたが、２名が入院しました。深夜帯は救急救命センターの医師が初期対応で、私に診療依頼があったのは未明に救急搬送された症例を含む２名でした。診療の合間には救急部の医師からケーキのご相伴にあずかり、一生忘れられないクリスマス･イブになりました。

24時間という短い支援活動でしたが、スタッフのみなさんからは感謝の言葉をいただき、充実した時間を過ごすことができました。中心街は一見何でもないようでしたが、よくみると建物のあちこちに亀裂があり、街で耳にした地元の方々の会話は原発事故に関する話題がほとんどでした。そんななか、救急部で診療に奔走する研修医達の姿を大変に心強く思いました。

今回の派遣では、管理課の嶋係長が関係機関との調整にあたってくださり、島田病院長をはじめ小児科教室からも快く送りだしていただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

いわき市立総合磐城共立病院

平成 22 年度決算の附属病院セグメント情報について

財務管理部財務管理課　予算・決算グループリーダー　雨宮　隆

国立大学法人は、平成16年度から法人ごとに財務諸表を作成し、個々の財政状態や運営状況を把握･公表することとなっています。公表データは本学ＨＰ･財務に関する情報(http://www.yamanashi.ac.jp/modules/profile_top/) にも掲載されており、このうち平成22年度の「附属病院セグメント情報」は下記の表のとおりです。

平成22年度においては、費用(支出) 面では、業務費用が 21年度に比較して、約３億５千２百万円伸びております。これは病院収益(請求額) の増に伴う薬品等、診療材料費の増、設備更新による減価償却費の増などから、診療経費(物件費) で約１億９千８百万円の増となっており、また、医員･研修医の手当改善等、看護環境充実のための看護師増員などから、人件費で約２億４千２百万円が増となっていることが主な要因です。また、収益(収入) 面では、皆様のご努力により、患者数が前年度に比べ入院で 2.1%増、外来でも 2.0%増などにより、附属病院収益は約11億３千４百万円、約8.8%の増収となっています。

附属病院の収益構造を見てみると、附属病院収益が約140億５千９百万円で附属病院の業務収益(約164億６千５百万円) の約85.4%を占めています。さらに、大学全体の業務収益約209億４千３百万円(国からの支援である運営費交付金収益を除く。) においては、約67.1%を占めており、附属病院収入が今後も病院経営や大学経営を大きく左右する要因となっています。

また、業務損益が約12億７千４百万円と利益計上になっておりますが、このうち、現金の裏付けのある利益(目的積立金) は約７億５千万円です。

平成22年度の附属病院財務状況は以上のようになりますが、今後も引き続き、病院の安定経営が図れるように、皆様のご協力をお願い申し上げます。

附属病院セグメント情報　(単位：千円)

区　分	平成21年度	平成22年度	増△減額	増減率
業務費用	14,838,527	15,190,858	352,331	2.4%
業務費	14,513,134	14,952,386	439,252	3.0%
教育経費	2,423	3,256	833	34.4%
研究経費	50,154	50,344	190	0.4%
診療経費	8,289,931	8,488,126	198,195	2.4%
受託研究費	62,307	52,089	△ 10,218	△ 16.4%
受託事業費	7,714	16,393	8,679	112.5%
人件費	6,100,605	6,342,178	241,573	4.0%
一般管理費	89,732	41,783	△ 47,949	△ 53.4%
財務費用	235,661	196,610	△ 39,051	△ 16.6%
雑損	0	79	79	0.0%
業務収益	15,520,910	16,464,986	944,076	6.1%
運営費交付金収益	2,297,630	1,993,457	△ 304,173	△ 13.2%
附属病院収益	12,925,315	14,058,901	1,133,586	8.8%
受託研究等収益	71,686	59,152	△ 12,534	△ 17.5%
受託事業等収益	7,999	16,668	8,669	108.4%
寄附金収益	8,593	7,744	△ 849	△ 9.9%
補助金等収益	109,216	146,715	37,499	34.3%
資産見返負債戻入	65,036	142,473	77,437	119.1%
雑益	35,435	39,876	4,441	12.5%
業務損益	682,383	1,274,128	591,745	86.7%

患者数比較　(単位：人)

区　分	平成21年度	平成22年度	増減率
入院 (１日当)(稼働率)	183,838 (504) (83.9%)	187,718 (514) (85.7%)	2.1%
外来 (１日当)	298,048 (1,232)	303,878 (1,251)	2.0%

小児科病棟の行事報告

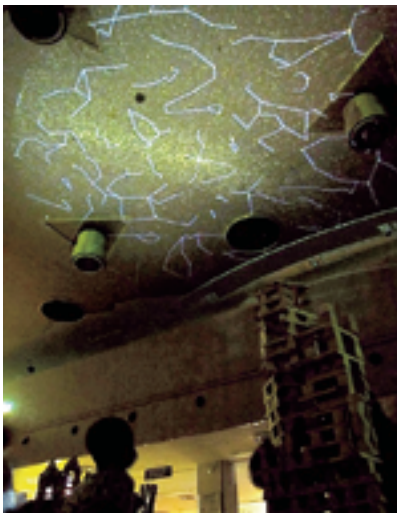
小児科　准教授　犬飼　岳史

小児科病棟では、中央市にある木楽舎つみ木研究所の荻野雅之さんをはじめとするスタッフの方々が、平成20年４月から月１回のペースで「つみ木広場」を開催してくださっています。毎回、６千個の積み木をプレイルームに持って来てくださり、子ども達が思い思いに、時にはお互いに協力しながら作品を積み上げています。

積み木で楽しむ子ども達

そうしたなか、昨年８月23日の夕方に36回目の「つみ木広場」が開催されました。夏休み期間中ということで、ご両親やきょうだいも一緒になって、外来ホールに敷かれた絨毯の上で１万５千個の積み木で楽しみました。作品が出来上がったところでホールの照明を消し、１つ１つの作品に荻野さんの手で明りが入れられました。ライトが当たった作品は幻想的な光を放ち感動的な美しさでした。ホール天井には、出張プラネタリウム事業を行なっているウィルシステム・デザイン（中央市）の高尾徹さんが、夏の星座を投影してくださいました。その様子は、積み木の街の上に広がる星空のようで、時折スーッと現れる流星に歓声があがりました。

明りが入れられた積み木作品



プラネタリウムが投影された会場

小児科病棟内の廊下には、平成20年７月に写真展示スペースが作られて、山梨県内の写真家の方々の作品が展示されています。その一角に昨年５月から半年間、たけいさきよさんの作品が展示されました。たけいさんは山梨県内で最初に「星のソムリエ」の認定を受けた方で、写野が円形になる特殊なカメラを使って撮影した八ヶ岳周辺の夜空の写真を中心に展示して下さいました。

たけいさきよさんと展示作品

（これらの行事は、３年目をむかえた花王コミュニティミュージアム・プログラムの助成を受けて行われました。）

院内学級音楽会の開催について

３階西病棟　看護師長　蓮沼　知津子

本院では、年に1度、「院内学級音楽会」が開催されています。

入院中の子ども達は、病気と闘いながら、つらい治療も乗り越え、毎日病室で頑張っています。治療のため、学習もできない日があったり、院内学級に通えず、ベッドサイドで学習したりすることもあります。日頃から病室での姿を見ているので、ベッドサイドから離れて、日頃の練習の成果を発表することや、大勢の前で話すことなど、病室とは別の緊張感にも関わらず、一生懸命に楽器を弾き、合唱する声･音･姿の全てに心を打たれました。「ヴァイオリニスト飯田先生と元気な仲間達」の方々や、ハンドベル演奏の「ふたばベルクワイア」の皆さんにも出演していただき、趣向をこらした楽しい演奏と、きれいな音色にも触れさせていただきました。子ども達は入院によって学校生活も制限される中、このような音楽会を通して、入院生活の充実が図れたと共に、個々の成長につながったことと思います。院内学級音楽会の開催に携わった全ての方々に感謝いたします。

飯田先生（左端）と「ふたばベルクワイア」の皆さん

院内学級音楽会での出来事

施設・環境部施設企画課　総務グループ　清水　春香

私は障害者雇用で採用され、職場の皆に支えられて働いています。私が毎年楽しみにしているのが院内学級の子ども達による音楽会です。私の部署の前の部屋で行われ、子供達の歌声、ハンドベルの音、ピアノやヴァイオリンの美しい音色が聴こえてきます。部署の中で「癒されるね」と話しています。

そんな音楽会で印象深い出来事がありました。それは平成20年の音楽会終了後のことです。エレベータで患者さんである10歳くらいの少女と一緒になりました。その子が私を見て、「車イスの人は大変だね」と私に声をかけたのです。長期入院しているにもかかわらず、人を思いやることができることに感動しました。つらい中で頑張っている患者さんは人の痛みが分かるのだなと思った出来事でした。この様な感動を味わえた行事を今後も続けていただければと思います。

ふれあいサッカー教室について

総務課　人事グループリーダー　土屋　豊

昨年10月29日、ヴァンフォーレ甲府と山梨大学との連携による社会貢献活動の一環として、『第2回ふれあいサッカー教室』が医学部グラウンドにおいて開催されました。これは、精神疾患を有する方々に、サッカーを通じ、仲間とのコミュニケーション能力の向上と協調性を醸成することによって、社会復帰の一助となることを目的としており、平成22年に引き続いての開催となりました。当日は、秋晴れの天候と、緑の眩しい芝生の上というとても気持ちの良い環境の中、ヴァンフォーレ甲府のアカデミーコーチの指導の下、参加したアトムズ甲府（精神的な困難を経験した方を中心に平成21年に編成された甲府市内のフットサルクラブ）や、各施設の支援スタッフの方々、また、本学、県立大学及び健康科学大学の学生ボランティアの皆さんの総勢約60名で、コミュニケーションゲームや、パス、ドリブルなどボールを使ったゲームなどで心と体をほぐし、最後は4つのチームに分かれてサッカーのミニゲームを楽しみました。

『音を楽しむ』

山梨大学アカペラ部　『Alpaca(アルパカ)』

山梨大学医学部アカペラ部に所属するAlpaca(アルパカ) です。Alpacaは今年4月に結成したばかりの1年生グループですが、夢は大きく、全国制覇を目指し、日々精進しています。

アカペラはイタリア語で、伴奏無しで合唱することを指します。近年のアカペラでは、ベース、ボイスパーカッションといった、口や喉を駆使して楽器を表現するパートもあり、熟達すると本物の楽器のように聞こえます。他にも多くの技法が続々と生みだされ、アカペラは進化の目覚ましい音楽のひとつといえます。ちなみにアカペラのスペルは“a cappella” ですが、逆から読むと“alpaca”（動物のアルパカの英語名）っぽいということで、私たちのグループ名を決めました。

さて、本院での発表は、七夕コンサートに続いて2回目となりました。クリスマスコンサートということで「ジングルベル」「赤鼻のトナカイ」そして子供達もたくさんいるので「アンパンマンのマーチ」を歌わせていただきました。たくさんの患者さんがいらしてくださり、また、笑顔でいらっしゃったので、楽しく歌うことが出来ました。ほんの少しですが、患者さんの励みになれたのかと思っています。普段、このような形で患者さんと接することが無いため、新鮮な感覚を味わうことが出来ました。さらに音楽の持つ魅力や意義について改めて考える良い機会となりました。

今後も本院で私たちの音楽を伝えていければと思っています。

12月21日に開催された附属病院クリスマスコンサートで患者さんに歌を披露するAlpacaの皆さん

山梨大学再発見

生命環境学部について

新学部開設準備室長　早川　正幸

平成24年4月より山梨大学では4学部目となる新学部「生命環境学部」が発足します。新学部は「自然と共生可能な豊かな地域社会の創生」を基本理念に掲げ、環境に調和した様々な先端技術や安全な食物の開発を目指す自然科学系の3学科と、研究成果を地域へ還元する役割を担う社会科学系の１学科より成る新しい文理融合型の学部です。構成学科は、最先端のバイオサイエンスとその応用を学ぶ生命工学科、ワイン科学を含む食物科学や農学の専門知識と技術を学ぶ地域食物科学科、自然環境の調査･解析･評価および管理能力を育成する環境科学科、そして流通経済、経営、行政、都市計画など地域社会のマネジメントに関する専門知識を習得する地域社会システム学科で、入学定員は130名です。

ワイン科学研究センターの地下貯蔵室での醸造分析

生命環境学部では、実験･実習･演習系の授業を重視し、まず全学科の学生が農場でのフィールドワークを中心とした専門基礎科目「生物資源実習」を履修することで実践的な能力を身に着けます。さらに、広範で複合的な諸問題に対処する力を育むため、他学科の専門発展科目も履修できる特徴的なカリキュラムが組まれています。なお、農場の一部の設備は既に完成し、工学部1年生による試行実習が現在行われ、好評を得ております。

農場（甲府市小曲町）の温室内における無農薬水耕栽培の試行実習

農学系学部の新設はかねてより県内外の農産業界や経済界などから強い要望があったものであり、地域社会の要請に応えるとともに日本や世界を舞台に活躍することができる人材の育成を目指します。

都市計画に関する演習授業

VEGETABLE OIL INK　VOC FREE
この印刷物は環境にやさしいVOC（揮発性有機化合物）成分フリーの大豆油を主体とした植物油型インキを使用して印刷しました。